

## 竹田鎮三郎画伯とインディオ

「蒙古斑」はモンゴロイド（モンゴル人種）が残した遺伝的痕跡とされる。赤ちゃんのお尻に出る小さな青いアザである。普通は4歳程度で消える。「児童虐待の跡だ!」と無知なアメリカ人が裁判に訴え出したこともある。この“刻印”に北・南米で遭遇すると、アジアとの切っても切れない結び付きを考えてしまう。

ペルーで会った白人風の学者から、うちの子どもの青アザは蒙古斑だよ?と聞かれたこともある。「あなたの先祖が先住民のインディオと昔どこかで交わった証拠ですよ」と当てずっぽうに答えたら、妙に安心したようだった。

そんなモンゴロイドと日本人との古い絆にこだわり、メキシコでインディオの絵画を描き続けている日本人画家がいる。

竹田鎮三郎（しんざぶろう）画伯である。今年で80歳になる。何年かに一度日本で個展を開く。あるとき銀座で竹田氏に会ったら、大きな麦わら帽子にひげ面。場所が場所だけに「インディオそのもの」の自由奔放な風体が目立っていた。オアハカというメキシコ南部の古都に居を構え、現地の学生を育て、自らも絵を描くことによって、インディオ文化の再活性化を目指している。

その竹田氏が久しぶりに日本に姿を見せた。今度の展覧会の場所は故岡本太郎画伯ゆかりの川崎市岡本太郎美術館である（展覧会は7月5日に終了）。1968年、岡本太郎が巨大壁画をメキシコのホテルのロビーに描いた際、竹田氏が助手として制作にかかわった縁で、付き合いが深まったという。

小田急線向ヶ丘遊園を降りて、

「生田緑地」のもっとも深いところにその美術館がある。メキシコに渡る前の瀬戸や沖縄の絵もある。アメリカ的なポップアート絵画も申し訳程度に飾られている。

しかし、大半はインディオの生活、心象風景を描いたものばかり。その画風は徹底している。ゴーギャンがタヒチで先住民の絵をたくさん残しているが、それに似た派手な色彩と構図は鮮烈な印象を与える。先住民の魂に魅せられた芸術家といえる。

竹田氏は1935年愛知県瀬戸市に生まれた。東京芸大に入学し、芸大時代は「瀬戸民平」と名乗っていたという。「民平」は民主主義と平和を意味する。小磯良平教室に入って腕を磨くが、学生運動にのめり込み、民衆に寄り添う生き方に共鳴していく。

1963年にメキシコに渡る。同郷の先輩画家北川民次の歩んだメキシコへの道を選んだようだ。そして先住民とかかわり合う。79年以降はオアハカ州のベニート・ファレス大学で美術の教鞭をとるようになった。熱血指導に人気が集中し、一度は「学部長候補」に推されたこともある。でも当時は本人によると「外国籍の人間は就任できなかった」という。大学での教育は50年の長きに及んだ。

彼に教えられたことがある。同じ中南米のインディオでもメキシコ・アステカと南米インカでは全く違う。同じようにみえて言語、風俗、習慣、性格などがばらばらだという。南米アンデス地域のインディオは暗く、覇気がない、と筆者が言うと、彼は「でもオアハカのインディオはもっと毅然として。モノ売りにまけると言う

と、それなら買って欲なくて結構と商品を下げられてしまうこともある」と反論した。

確かに中南米では4万語の文字をもつ中米マヤ族がある一方で、文字をもたないインカ帝国のような種族もいる。

オアハカには未発掘の遺跡がたくさんある。かつて竹田氏に案内してもらった遺跡からあたりを見回すと、小山のように盛り上がったところがある。今は緑に覆われているが、「あれはみんな掘れば大きな遺跡だよ」と言う。メキシコ南部だからマヤ遺跡に分類されるのだろうか。

今から1万数千年前、モンゴロイドはアジアから北や南に拡散していった。その一部は「陸橋」だったベーリング海峡を渡り、北・南米大陸に住み着いた。それがインディアンやインディオになった。アジアで南下したモンゴロイドはおそらく日本やポリネシアに達したのだろう。ポリネシアから島づたいに南米大陸に渡ったという異説もまことしやかにささやかれる。

モンゴロイドのうち、遺伝的にもっとも日本人に近いのは韓国、中国北部、モンゴル。次にベトナム、タイなどの東南アジアと中国南部。そして遠い仲間がイヌイト（エスキモー）や北米インディアン、南米インディオという考古学的調査がある。

われわれ日本人とは遠い親戚のようなものだ。竹田氏の半生を追っかけていると、古代のモンゴロイド幻想に取り憑かれたような不思議な気分になる。

## 汚職とジェイチャーニョ

FIFA（国際サッカー連盟）幹部の汚職が世界を震撼させている。放映権やスポンサー料の一部を共謀して不正に受け取ったとされる。ワイロの大きさも尋常ではないが、その理由たるやお粗末極まりなく、開いた口がふさがらない。

復習しよう。米司法省は5月末、米銀の口座を使って組織的な不正送金が行われたとして、14人を起訴。これを受けてFIFA本部があるスイスの捜査当局は元副会長、理事を含む7人を逮捕した。たまたまFIFA会長選があり、ブラッター会長が再選されたが、混乱が広がるのを見て辞任を表明する事態になっている。

起訴・逮捕者の多くは中南米や途上国出身だ。南米選手権（コパ・アメリカ）では4大会分の放映権をめぐり、企業側が契約料の一部、100億円を超す巨額資金をFIFA幹部に渡した疑惑も浮上している。サッカーはよほどもうかるものらしい。

トリニダード・トバゴ、ベネズエラ、ブラジル、アルゼンチン、コスタリカなどではサッカー関係者の捜査が進んでいるという。

FIFAが「商業主義」に走り、大金が動くようになってから、おかしいことになった。サッカー・ワールドカップ（W杯）は40億ドル以上の市場規模をもつ世界最大のイベントだ。放映権だけではなく、開催国選出や会長選挙、理事選挙でも裏金がやりとりされているとみた方が自然だ。

元FIFA理事の小倉純二・日本サッカー協会名誉会長の著書『サッカーの国際政治学』によれば「（開催国選出の）選挙を巡っては明確なルールは定められていない。要するに、何でもありの世

界なのだ」とある。

背景にはお金をもらって動くのは当たり前という暗黙の了解、FIFAの“常識”があるのではないか。カネの集まる場所、ワイロは消えることはない、といってしまうとそれまでだが、それにしても――。

中南米やほかの途上国が標的になっていると聞き、連想したのは「いいかげん」といわれるラテン的体質、とりわけブラジル人の国民性を表す「ジェイチャーニョ」のことである。

ブラジル人が好んで使うポルトガル語で、「ジェイト」（意味は「方法」「やり方」）を少しかわいらしく言うとジェイチャーニョだ。何か困ったことが起こったときに、決まりごとやルールだからとあきらめず、何かほかに方法はないかと工夫をして問題解決を図る。

これを好意的に解釈すれば、阿吽の呼吸、以心伝心の日本人と似ている部分があり、規律や規則よりも人間関係を大切にすばらしい国民性との評価もある。

武田千香東京外国語大学教授の著書『ブラジル人の処世術 ジェイチャーニョの秘密』によると、ジェイチャーニョは「秩序ある世界」ではなく、「脱・秩序」の中にある。武田先生はこんな例をあげる。

——「ホテルのチェックアウトの時間は12時だが、どうしても14時までいたい。悪びれずホテルに頼んだら成功した」

——「用足しに行った人のために列の番をとっておいてあげた」

——「スーパーのレジ行列で、買う品数が少ない人を先に通してあげた」

以上はジェイチャーニョの「よい

部分」だ。

しかし、いかにもラテン系という「ちょい悪」話もある。「歯医者に行く必要があったので、黙ってクライアントとのアポをキャンセルした」

問題はその後だ。ジェイチャーニョがひとたび方向を間違えると、確信犯のルール破りにつながり、「汚職」や「腐敗」の領域に足を踏み入れることになりかねない。それは次のような例だ。

——「ある公務員が政府との契約成立で力を貸した企業からクリスマスプレゼントを受け取った」

——「公的機関に従事している友人に頼んで、書類の発行を早めてもらう」

こうなると贈収賄か好意か、善悪の判断が難しい。

ブラジル人でサッカー日本代表監督も経験したジーコ氏が「私がFIFA会長に立候補する」と息まけば、上院議員のロマリオ氏（かつての名フォワード）も「汚職を徹底的に浄化する」と怒っている。

FIFA不祥事が表面化する以前にブラジルでは国営石油会社ペトロブラスの何千億円もの巨額贈収賄事件が起きている。議員を含めた数十人が逮捕され、大手建設会社のトップも身柄を拘束された。

ブラジルには汚職を誘発する土壌があるといわれたらどうするか。ラテン系だから、とごまかすか。ジェイチャーニョの悪い部分が出たというか。しっかりした反論材料がないと、ブラジルは苦しい。

無理を承知でいえば、FIFAもブラジルも巨大な“伏魔殿”をガラス張りにすることだろう。そうでないと、永遠にワイロ天国が続く。（日本ブラジル中央協会 常務理事 和田 昌親）